

幸田露伴『幽情記』の典拠考

王 菁 潔

一、はじめに

『幽情記』（大倉書店、大8・3）は、幸田露伴が大正四年七月から六年七月にかけて、婦人雑誌などに発表した十三篇の作品からなる。出処があり、詩がある中国の女性を中心とする物語を集めたものである。

従来の露伴像は簡単に言えば、明治の理想主義作家であり、大正昭和期の文学活動はあまり注目されてこなかった。その時期の文学活動は現在露伴研究の中心と言つて良い。『幽情記』の出版一ヶ月後に発表された「運命」（「改造」大8・4）が露伴の文壇復帰の契機となつたのに対して、『幽情記』は当時さほどの反響を呼ばず、中国の「情詩史」や「軟文学」の研究とされ、文学的価値は殆ど評価されなかつた。しかし、露伴晩年の高足である塩谷賢氏は『幽情記』が露伴の文壇復帰の第一弾と述べている。

また、先行研究を概観すると、柳田泉氏が『幽情記』を露伴の創作と認め、史伝に分類している。しかし、その主題を「人事と運命の深秘、因縁奇遇の不可思議」とし、「運命」の小型

版として扱う²⁾。さらに昭和三十年代よりはじまる露伴を再評価する動きの中、篠田一士、瀬里広明、登尾豊の諸氏が、『幽情記』に、露伴の近代性を見出そうとしていく。篠田氏は文章表現に注目し、大正時代からの文学活動を「自然主義文学から小説」にいたる近代日本文学の主潮に対する真向からの挑戦である」として位置づけ、『幽情記』の詩的性格を認め、その詩的世界から「運命の縁」を読み取っている³⁾。瀬里広明氏は露伴を文明批評家として評価し、キリスト教の愛との関わりで、『幽情記』の中の「共命鳥」と「狂瀟艷魂」を男女の愛の物語とし、その愛は仁に達するものと主張している⁴⁾。更に登尾豊氏は、『幽情記』が明治末から大正初期まで露伴の亡き妻への思いと再婚生活への不満を反映する史伝だと指摘し、「作者の内面を表わすという作品の近代性」を強調している⁵⁾。

以上の先行論によれば、『幽情記』は運命を語る作品、または男女の愛を語る作品であるとされてきていることが分かる。だが、それらは作品解釈に基づいた評価ではない。

露伴の「幽情記引」によれば、「物語には皆出處あり。吾が作り設けたるは無し」とあり、作品中において「明史卷二百八十五に記す」のように出処を明記する場合もある。同時

代評で研究の類いと見做された『幽情記』を文学作品として認定する際、その出処を明確にすることは有効な方法である。なぜならば、出処を特定すれば、創作する部分が浮き彫りになるからである。これまで『幽情記』の出処を探る作業は原田親貞と井波律子の両氏が行っている。原田氏は二回にわたって『幽情記』諸篇が依拠した中国の古典を示し、露伴の参看した資料の範囲は広く、数も多いと指摘している。井波氏は中国の筆記類との関係に注目し、「玉主」は「作りかえ」の手法が最も顕著であり、王朝交替期に生きる人々を描く「樓船斷橋」「共命鳥」「泥人」「狂瀟艶魂」の四作は「人々の醜悪を稀薄している」と指摘し、原典よりイメージのよい「懐かしい男と愛おしい女」が繰り広げる纏渺とした清新な物語世界」を作り上げたと評価している。

しかし、典拠考には検討の余地がまだまだ多く残っている。例えば、「玉主」の典拠に関して、井波氏の言う『万曆野獲編』（妓女・劉鳳臺）よりも、原田氏の指摘した、明の詩人の徐燾の「玉主行有引」のほうが内容も文章表現も近いことが認められる。井波氏が比較に使う資料は適切ではない。一方、原田氏の示したテキスト、特に詩に関しては、概ね「鉄崖先生古楽府」といったような詩人の個人詩集を挙げている。しかし、『幽情記』の本文と相違する場合があり、原田氏も露伴が「どのテキストに拠ったかは未確認である」と述べている。一篇の詩が様々な書物に収録されている場合があり、露伴が必ずしも直接詩人の個人詩集を読んでいたわけではない事を考慮する必要がある。言い換えれば、アンソロジーのような書物より『幽情記』の材料

を得た可能性がある。本稿は原田氏の先行研究を踏まえ、露伴が拠り所にした書物を探求したい。

二、「情史」

詩のある物語の類、つまり詩話や筆記小説等において調査を行い、『幽情記』の典拠を探したところ、先ず明・馮夢龍編『情史』の「陸務観」は、『幽情記』の中の「幽夢」と類似性が高く、『幽情記』の題材を多く含んでいることが分かった。『情史』における『幽情記』各篇の物語と類似する箇所を示すと、左の表1の通りである。

(表1)

作品名（『幽情記』の順番を記す）	『情史』における類似する物語の所在
二、師師	卷六情愛類、「李師師」、「長沙義妓」
七、泥人	卷八情感類、「白頭吟」
九、碧梧紅葉	卷十二情媒類、「于祐」
十一、金鵲鏡	卷四情俠類、「楊素」、「紅拂妓」
十三、幽夢	卷十四情仇類、「陸務観」

『情史』は明代後期の馮夢龍（一五七四～一六四六年）の編纂とされている文語の筆記小説集である。『情史類略』『情天室

鑑」とも称される。男女の情事を情貞、情縁、情私など二十四類に分類して記した書物である。一篇の作品の最後に、編者による評論、類話、考証もある。「幽情記」は、男女を記す内容といい、筆記体の体裁といい、「情史」と似ているのである。

『情史』の日本における受容について、徳田武氏は、『情史』は都賀庭鐘・上田秋成等の江戸中期の人々には盛んに読まれており、さらに遡って貞享頃にも『情史』が日本に伝わっていたと述べている。江戸期に既に『情史』が流布していたことが分かる。

齊藤希史氏は、明治初年『情史』からおもだった話を抜粋して、さらに返り点と送り仮名を付して出版された漢文短編小説集『情史抄』が広く読まれたと指摘している。森鷗外の自伝的要素の濃い「キタ・セクスアリス」(『昂』第七号、明治四〇年九月)の中に中国の明小説への言及があり、『情史』が取り上げられている。東京大学附属図書館蔵「鷗外文庫」に収められた『情史』には、圈点、傍点などが多く見られ、鷗外による書き込みが散見されるという。以上の通り、『情史』は江戸期から明治まで広く受容された書物であることがわかる。露伴もそれを手に入れることは容易である。

次に『幽情記』の「幽夢」¹³と『情史』巻十四情仇類「陸務観」とを比較し、両者の類似性を検証する。比較の作業は語句と内容と二つの面から行う。語句の面は詩の語句、固有名詞、数字等に注目して比較する。なぜならば、露伴が典故として引用する場合、踏襲するはずの箇所だからである。また、露伴は一篇の中に詩とその逸事を幾つも並べることが多い。その詩と逸事

の内容と配列の順序から出典であるかどうかを判断できる。なお、『情史』との比較だけでは「幽夢」と相似する程度を測定し難いので、それをより明瞭に表示するために、原田氏の前掲論文「中国文学と幸田露伴(二)——主として『幽情記』をめぐって」に指摘されたテキストを対照として導入する。以上は比較作業の方法である。まず語句レベルで比べてみる。「幽夢」に陸游の禹跡寺の詩が書き下して引用してある。原田氏の挙げた『劍南詩稿』、そして『情史』「陸務観」のテキストを合わせ比べてみると以下の通りである。

落日に城の南 鼓角哀しみ、

沈園も 復舊の池臺に非ず。

心を傷ましむ橋の下の春の波の縁、

曾て見き驚鴻の影を照らし来れるを。

(「幽夢」、傍線―引用者、以下同じ)

城上斜陽画角哀、

(中略)

曾是驚鴻照影来。

(「劍南詩稿」卷三十八)

落日城南鼓角哀、

(中略)

曾見驚鴻照影来。

(「情史」巻十四情仇類、「陸務観」)

原田氏の論考では、この詩は『劔南詩稿』卷二十八所載のものであるが、起句の「城上斜陽画角哀」と結句の「曾是驚鴻照影来」の部については、露伴が「落日に城の南 鼓角哀しみ」及び「曾て見き驚鴻の影を照らし来れるを」としており、露伴の引用は陸游の詩集と違つて指摘している。その異同の箇所について、『情史』『陸務観』の方は、「幽夢」と一致していることが分かる。また、もう一首の壞壁斷雲の詩を見てみよう。

年来の俗念 消除し盡し、
回向す 蒲籠に 一炷の香。

〔幽夢〕

年来妄念消除盡、
回向蒲籠一炷香。

〔劔南詩稿』卷二十五)

年来俗念消除盡、
回向蒲籠一炷香。

〔情史』卷十四情仇類、〔陸務観〕

原田氏の論考では、この詩は『劔南詩稿』卷二十五所載のもので、「年来妄念」及び「蒲籠一炷香」を露伴は「年来俗念」及び「蒲籠一炷香」としている。『劔南詩稿』と「幽夢」の異同を指摘している。しかし、見ての通り、「幽夢」の本文は

『情史』『陸務観』と完全に一致していることが分かる。以上、語句レベルで検証してきた。次に内容の面から『情史』と「幽夢」との関係を検証する。表2は「幽夢」の内容を簡条書きにしたものである。表3は『情史』卷十四情仇類、「陸務観」の内容である。

(表2)

①	陸游の伝
②	陸游と唐氏の逸話、叙頭鳳の詞
③	過去の思い、禹跡寺の詩
④	壞壁斷雲の詩
⑤	沈園に行く夢を見て作った二章の詩
⑥	姑悪鳥の伝説と詩
⑦	菊枕の詩
⑧	妾の題壁の詩、生查子の詞
⑨	聖門一字の銘、怨

(表3)

②	陸務観 陸務観游初娶唐氏、於其母夫人為姑侄。伉儷相得、而弗獲於姑、因出之。唐改適同郡宗子。嘗春日出遊、相遇于禹跡寺南之沈氏園。唐以語宗子、遣致酒殺、陸悵然久之。為賦叙頭鳳、題園壁云、紅酥手、黃藤酒、滿城春色宮
---	---

③ 牆柳。東風惡、歡情薄。一懷愁緒、幾年離索。錯錯錯。春如舊、人空瘦。淚痕紅、濕綃綃透。桃花落、閒池閣。山盟雖在、錦書難託。莫莫莫。唐兒而和之、有「世情薄、人情惡」之句。未幾、快然而卒。聞者為之悵然。放翁自與唐邂逅、終不能忘情。每過沈園、必登寺眺望。有絕句云、落日城南鼓角哀、沈園非復舊池臺。傷心橋下春波綠、曾見驚鴻照影來。及唐死、沈園亦三易主矣。放翁悵然有懷、復有詩云、楓葉初丹、桐葉黃、河陽愁鬢怯新霜。林亭感舊空回首、泉路惡誰說、斷腸。壞壁醉題塵漠漠、游雲幽夢事茫茫。年來俗念消除盡、回向蒲龕一炷香。嗣後夢、游沈氏園、又作二絕云、路近城南已怕行、沈家園裏更傷情。香穿客袖梅花在、綠黯寺橋春水生。城南小陌又逢春、只見梅花不見人。玉骨久成臺下土、墨痕猶鎖壁間塵。

④ 又陸放翁之獨、宿驛中、見題壁云、玉塔螺蛸鬧清夜、金井梧桐辭故枝。一枕淒涼眠不得、呼燈起作感秋詩。放翁詢之、則驛卒女也、遂納為妾。方餘半載、夫人逐之、妾賦卜算子云、只知眉上愁、不識愁來路。窗外有芭蕉、陣陣黃昏雨。曉起理殘妝、整頓教愁去。不畫春山、依舊留愁住。夫出一愛妻、得一妒妻、母夫人之為放翁計者誤矣。然愛妻見逐於母、愛妾復見逐於妻、何放翁之多不幸也。

⑤ (「情史」卷十四情仇類、「陸務觀」)

原田氏は「幽夢」が主人公陸游の詩集「劍南詩稿」「渭南文集」及び「詞綜」に基づいて書かれたと指摘している。しかし、「情史」「陸務觀」では、「幽夢」②⑤⑧(表2による)の詩五首は同じ内容で同じ順番に並べられており、偶然とは言い難いほど一致しているのである。「情史」「陸務觀」に⑥⑦の詩はない。おそらく露伴は最初に「情史」を用い題材を得たが、その

後陸游の詩集を読んだことによつて発見し、後から⑥⑦の詩を付け足したと考えられる。

以上、語句と内容の両方から比較し、原田氏が指摘したテキストより「情史」「陸務觀」のほうが「幽夢」との類似性が高いことが認められる。「幽夢」の本文が「劍南詩稿」のテキストと相違するが、「情史」「陸務觀」と非常に一致している。また「幽夢」にある詩は「劍南詩稿」「渭南文集」及び「詞綜」に散在しているが、「情史」「陸務觀」では「幽夢」と同じ順番で収められている。したがつて、露伴が「情史」「陸務觀」に拠つて「幽夢」を書いた可能性は高い。

さらに、「情史」に類似の物語が見られる「師師」「泥人」「碧梧桐葉」「金鵲鏡」は「幽夢」ほど一致していない。しかし、「幽夢」が「情史」「陸務觀」を拠り所としたとすれば、「情史」から話を得て、さらに他の資料にあたり、この四作を作つた可能性はある。露伴は「情史」をいわゆる種本として使つていたのであろう。

三、「続本事詩」

第二節では「情史」と「幽情記」とを比較し、「情史」は種本であると推察した。ただし、「情史」は「幽情記」すべての物語を含んでいない。残りの作品は露伴が何を見て取つたのか。それらの作品は主に明末清初の物語である。「情史」は明末の編纂物であり、明清交替期の物語は収録されていない。調べたところ、「幽情記」の明末清初の物語は清・徐銳編の「続

「本事詩」と類似することが分かった。「情史」と「続本事詩」における「幽情記」各篇の物語と類似する箇所を示すと、表4の通りである。

(表4)

作品名	物語の所在	物語の時代
一、眞眞	「情史」卷六情愛類、貝瓊「真真曲」 「続本事詩」卷一前集	元
二、師師	「情史」卷六情愛類、「李師師」、「長沙義妓」	宋
三、樓船斷橋	「続本事詩」卷一前集、楊維禎「西湖竹枝歌」	元末明初
四、水殿雲廊	「続本事詩」卷一前集、王蒙「宮詞」	明初
五、共命鳥	「続本事詩」卷七後集、錢謙益	明末清初
六、一枝花	「続本事詩」卷五前集、姚士舜、沈珣、袁宏道	明末
七、泥人	「情史」卷八情感類、「白頭吟」 「続本事詩」卷二前集、鄭元「管夫人畫竹石」	宋末元初
八、玉主	「続本事詩」卷五前集、徐燭「玉主」	明末
九、碧梧紅葉	「情史」卷十二情煤類、「于祐」	唐
十、狂瀟艶魂	「続本事詩」卷九後集、周亮工「海上盈夢七姬」	明末清初
十一、金鵲鏡	「情史」卷四情俠類、「楊素」、「紅拂妓」	六朝

十一、桃花扇	「続本事詩」卷八後集、吳偉業	明末
十三、幽夢	「情史」卷十四情仇類、「陸務観」	宋

このように「情史」「続本事詩」両方に類似する「泥人」以外、他の作品はそれぞれ「情史」か、「続本事詩」のいずれかに所収された話である。「続本事詩」と類似する作品は九作もある。次に、「続本事詩」と「幽情記」との関係を考えてみたい。

清・徐鉉の『続本事詩』は出版時の表題が「本事詩」である。本稿においては、唐・孟榮編の「本事詩」と区別をつけるために、現在の通称通り、清・徐鉉の「本事詩」を「続本事詩」と呼称する。先行する唐・孟榮の「本事詩」は、詩ができるに至った逸話、いわゆる〈事〉を記す詩話の体裁を創始した。その体裁を模倣した幾つかの書物のうち、徐鉉の「続本事詩」は孟榮の理念に最も近いものと言われている。⑬⑭というのは、詩を収録するだけでなく詩にまつわる物語も録されているからである。「続本事詩」は詩人別に明初から清初の詩を収録する詩話である。徐鉉が「誦_レ之尊前酒辺」と言うように、すなわち酒宴の席で話題にするという目的で編輯されている。宮廷・香閨・青樓・遊仙等の詩が編集されており、艶情豊かな本である。一方、女性の不幸な運命が詠まれ、国の興亡に対する感慨が窺える。「幽情記」各篇の中、半分以上は女性向けの雑誌に掲載されており、女性と関わる詩と逸事を多く持つ「続本事詩」は良い材料となったのであろう。

全国漢籍データベース・日本所蔵中文古籍データベースは、日本の主要な大学図書館・公共図書館が所蔵する漢籍の書誌情報について、「経・史・子・集」の四部分類（叢書部を加えて五部分類）に基づきすべて網羅することを目的として、現在も構築中の総合漢籍目録データベースである。「続本事詩」の日本における受容を考える際、このデータベースを用い、その所蔵を調査した。清刊本のデータが十三件あり、中には昌平坂学問所本があった。このことから江戸時代に官学のテキストとして流通していたことが分かる。

また、筑波大学附属図書館蔵、徐鉉『本事詩』十二巻には、「故教授文學博士那珂通世遺書」「那珂」梧樓主人坐右圖書「那珂文庫」の印記がある。梧樓は那珂通高（一八二七—一八七九年）の号である。「梧樓主人坐右圖書」から窺えるように、徐鉉の『続本事詩』は那珂通世（一八五一—一九〇八年）が養父の那珂通高から承継した漢籍である。徐鉉の『続本事詩』は、学者に愛読されていたことが窺える。

『続本事詩』と類似する物語を有する『幽情記』の作品を比較すると、まず「眞眞」が『続本事詩』のテキストと類似性が高いことが分かった。

原田氏は前掲「中国文学と幸田露伴（一）——主として『幽情記』をめぐる』において貝瓊の『清江貝先生詩集』巻二の「真真曲」を使っていると指摘している。内容から見て露伴の「真真」と似ているが、人名のところに『幽情記』の「眞眞」と異同があるのである。『続本事詩』では貝瓊の「真真曲」が収録

されており、『清江貝先生詩集』に収められた「真真曲」と語句のレベルで異同がある。例えば、人名についての記述は以下の通りである。

且年齒相當れる翰林の屬官黃逮（二に曰く王杖）といふもの

（眞眞）

且謂 翰林屬官王棗 曰

（貝瓊『清江貝先生詩集』真真曲序）

且謂 翰林屬官王杖 按 高季迪集王杖作黃逮、且云「逮後至顯官。同館之士、多賦詩者。」

（『続本事詩』巻二前集、貝瓊「真真曲」）

「眞眞」には眞眞の夫が「黃逮（二に曰く王杖）」と記されている。貝瓊の『清江貝先生詩集』には「王棗」と記され、「眞眞」の記述と違う。それが、『続本事詩』巻二前集、貝瓊「真真曲」の序には、「眞眞」における名前と同じである。原田氏の指摘した貝瓊の詩集より、『続本事詩』のほうが「眞眞」に近似しており、典拠としての可能性が高い。

また、『幽情記』第五篇の「樓船斷橋」も『続本事詩』と類似性が高いのである。表5は「樓船斷橋」の内容を簡条書きで示したものである。表6は原田氏の指摘した楊維禎「鉄崖先生古楽府」「西湖竹枝歌」の内容であり、表7は『続本事詩』巻一前集、楊維禎「西湖竹枝歌」の内容である。

(表5)

①	竹枝の紹介
②	楊維禎の紹介
③	楊の西湖竹枝歌
④	薛氏二女の蘇台竹枝詞
⑤	曹妙清の竹枝詞
⑥	張妙靜の竹枝詞
⑦	楊維禎に和する者五十余人

(表6)

③	鐵崖先生古樂府卷之十 西湖南湖天下無。 蘇小門前花滿 _レ 株、蘇公堤上女當 _レ 城、南官北使須 _レ 到此、 又 鹿頭湖船唱 _レ 、船頭不 _レ 宿野鴛鴦、為 _レ 郎歌舞為 _レ 郎死、 不 _レ 惜真珠成 _レ 斗量。 又 家住城西新婦磯、勸 _レ 君不 _レ 唱 _レ 縷金衣、琵琶元是韓朋木、 彈得鴛鴦一處飛。 又 勸 _レ 郎莫 _レ 上 _レ 南高峰、勸 _レ 我莫 _レ 上 _レ 北高峰、南高峰雲北高 雨、雲雨相催愁 _レ 殺濃。 又 湖口樓船湖日陰、湖中斷橋湖水深、樓船無 _レ 舵是郎意、斷橋
---	--

有_レ柱是儂心。

又
病春日可_レ如何、起向_レ西窓_レ理_レ琵琶、見_レ說枯槽能_レ卜
命、柳州街口問_レ來婆。

又

小小渡船如_レ缺瓜、船中少婦竹枝歌、歌聲唱入_レ空侯調、
不_レ遣_レ狂夫橫渡_レ河。

又

石新婦下水連_レ空、飛來峯前山萬重、妾死甘為_レ石新婦、望_レ
郎忽似_レ飛來峯。石新婦、妾王龜石是也。

又

望_レ郎一朝又一朝、信_レ郎信似_レ浙江潮、床脚搭龜有_レ時爛、
臂上守宮無_レ日銷。

(楊維禎「鐵崖先生古樂府」)

(表7)

③	西湖竹枝歌 一作「小臨海曲」 鐵崖既作「西湖竹枝歌」、一時和者甚衆、遂有 _レ 薛氏女蘇臺 竹枝之唱、傳以為 _レ 佳話云、 蘇小門前花滿 _レ 株、蘇公堤上女當 _レ 城、南官北使須 _レ 到此、 江南西湖天下無。 鹿頭湖船唱 _レ 、船頭不 _レ 宿野鴛鴦、為 _レ 郎歌舞為 _レ 郎 死、不 _レ 惜真珠成 _レ 斗量。 又 家住城西新婦磯、勸 _レ 君不 _レ 唱 _レ 縷金衣、琵琶原是韓朋 木、彈得鴛鴦一處飛。 又 勸 _レ 郎莫 _レ 上 _レ 南高峰、勸 _レ 我莫 _レ 上 _レ 北高峰、南高峰雲北高 雨、雲雨相催愁 _レ 殺儂。 又 湖口樓船湖日陰、湖中斷橋湖水深、樓船無 _レ 舵是郎意、斷橋
---	---

有柱是儂心。
病春日日可如何、起向西窓理琵琶、見說枯槽能卜
小、柳州街口問來婆。
小渡船如缺瓜、船中少婦竹枝歌、歌聲唱入空篋調、不
遣狂夫橫渡河。
石新婦下水連空、飛來峰前山萬重、妾死甘為石新婦、望
郎忽似飛來峰。石新婦、秦王鸞石也。
望郎一朝又一朝、信郎信似浙江潮、牀脚搗龜有時
爛、臂上守宮何日銷。
附薛氏蘇臺竹枝詞 吳郡薛氏二女、蘭英惠英、聰慧能詩。見鐵崖
西湖竹枝詞、笑曰、西湖有竹枝曲、東吳獨無乎。乃效其體、作蘇
臺竹枝詞十章。楊兒其藁、手題二詩於後。云、錦江只見薛鸞箋、
吳郡今傳蘭惠篇。文采風流知有日、進珠合璧照華筵。離弟雖
兒竝有名、英英端不讓瓊瓊。好將筆底春風句、譜作瑤琴絃上聲。
自是名播遠邇、咸以為班姬蔡女復出也。
姑蘇臺上月團圓、姑蘇臺下水潺潺、月落西邊有時出、水
流東去幾時還。
館娃宮中麋鹿游、西施去泛五湖舟。香魂玉骨歸何處、
不及貞娘葬虎邱。
虎邱山上塔層層、靜夜分明見佛燈。約伴燒香寺中去、
自將鈇劍施山僧。
門泊東吳萬里船、烏啼月落水如煙。寒山寺裏鐘聲早、漁
火江楓惱客眠。
洞庭金柑三寸黃、笠澤銀魚一尺長。東南佳味人知少、玉食
無由進上方。
荻芽抽筍棟花開、不見河豚石首來。早起腥風滿城市、
郎從海口販鮮回。
楊柳青青楊柳黃、青黃變色過年光。妾似柳絲易憔悴、
郎如柳絮太顛狂。
翡翠雙飛不待呼、鴛鴦竝宿幾曾孤。生憎寶帶橋頭水、半

入吳江、半太湖。
一鵝鳳鬢綠如雲、八字牙梳白似銀。斜倚朱門翹首立、
往來多少斷腸人。
百尺樓臺倚碧天、欄杆曲曲畫屏連。儂家自有蘇台曲、
不卜去西湖唱採蓮。
按鐵崖竹枝原倡自薛氏女外、有士女曹妙清、號雪齋、居錢塘、
善鼓琴、工書法。嘗和鐵崖西湖竹枝曲云、美人絕似董嬌娘、家住
南山第一橋。不肯隨人過湖去、月明夜後自吹簫。因寫詩寄楊、楊答之
云、紅牙斝帶紫羅氍、雪水初融玉帶袍。寫得薛鸞箋草帖、西湖紙價可
能高。玉帶袍、其家現名也。又有士女張妙淨、字惠連、居塘人。善
詩章音律、居春夢樓、亦與鐵崖倡和。其竹枝詞云、憶把明珠賈
妾時、妾起梳頭卸畫眉。郎今何處妾獨在、怕見花間雙蝶飛。
〔統本事詩〕卷一前集、楊維禎「西湖竹枝歌」

⑤

原田氏は前掲「中国文学と幸田露伴(一)——主として『幽
情記』をめぐる」において、「楼船断橋」中に引いている竹
枝歌(表5の③)は、楊維禎「鉄崖先生古楽府」卷十にある「西
湖竹枝歌九首」(表6)のうちの第四首、第五首及び第八首で
あると述べている。語句レベルの相違はないが、露伴が他に引
用した詩(表5の④⑤⑥)の典拠については述べられていない。
一方「統本事詩」卷一前集、楊維禎「西湖竹枝歌」(表7)に
は、表5の③④⑥の詩を収めており、しかも同じ順番となつて
いる。「統本事詩」「西湖竹枝歌」と「楼船断橋」と類似性が高
く、露伴が「統本事詩」に拠つて「楼船断橋」を書いた可能性
はあるのである。
以上「眞眞」「楼船断橋」は「統本事詩」に拠つたことを検

証した。それ以外の七作も内容において『続本事詩』と類似している。ただし、語句レベルでは「桃花扇」「狂瀟艷魂」の詩語に相違があり、引用は他のテキストに拠った可能性がある。露伴は『続本事詩』より物語を得て、「眞眞」「桜船斷橋」のように直接引用もしたが、さらに他の資料を求める場合もあったようである。しかし、『続本事詩』は露伴が『幽情記』を創作する際の種本であった事は先ず間違いないまい。

五、まとめ

『情史』と『続本事詩』はともに『幽情記』の創作時期まで日本に受容されており、『情史』は筆記小説集であり、『続本事詩』は詩話であり、何れも詩のある物語である。内容に関して、『情史』では男女の情事、『続本事詩』では女性を詠む詩と物語が主として収録されており、『幽情記』にとつて好都合の材料である。

また「幽夢」「眞眞」「桜船斷橋」を見た通り、『情史』または『続本事詩』の關係する部分は内容及び語句の面において酷似していることから、典拠として認めることができる。さらに他の作品は『情史』『続本事詩』のどちらかに共通する話が含まれていることから、『情史』と『続本事詩』はいわゆる『幽情記』の種本と考えてよいだろう。

今後作品に即して分析を行い、露伴の方法について考察し、その上で『幽情記』の全体を捉えたい。大正期において文壇復帰の第一弾とされる『幽情記』を究明することによって、この

時期の露伴の文学観を把握することができると考えられる。

註

- (1) 「新刊紹介 幽情記(幸田露伴著)」「太陽」大8・5、「新刊紹介」(読売新聞)大14・6・25
- (2) 柳田泉「幸田露伴」中央公論社、昭17・2
- (3) 篠田一士「幸田露伴のためにI」(文学)34巻5号、昭41・5
- (4) 瀬里広明「露伴における愛について」(掲載誌不詳、昭42・11、後「文壇批評家としての露伴」に収録、未來社、昭46・9)
- (5) 登尾豊「幽情記」の周辺——露伴の明治から大正へ——(国語と国文学)59巻5号、昭57・5
- (6) 原田親貞「中国文学と幸田露伴(一)——主として『幽情記』をめぐって」(学苑)505巻、昭57・1、「中国文学と幸田露伴(二)——主として『幽情記』をめぐって」(学苑)517巻、昭58・1
- (7) 井波律子「露伴の中国小説——『幽情記』と『運命』について」(文学)6巻1号、平17・1
- (8) 「中国学芸大事典」(大修館書店、昭53・10)では詩を評論したり、また詩人の逸話故事などを記した書物と定義されている。
- (9) 前掲註8の「中国学芸大事典」では、六朝ごろ流行した志怪の流れをくんで神怪なことを雑録したものをいい、文語体の短編小説をいうと説明されている。
- (10) 徳田武「西鶴と十七世紀中国文学——『西鶴諸国ばなし』と『情史』——」(西鶴新展望)勉誠社、平5・8
- (11) 齊藤希史「漢文脈と近代日本——もう一つの世界」日本放送出版協会、平19・2
- (12) 林淑丹「森鷗外と明清小説——『舞姫』「うたかたの記」『雁』を中心に」(国際日本文学研究会会議録)28巻、平17・3
- (13) 初出…「淑女画報」大4・8、原題…「美人と詩人(古今婦人大觀其二)」
- (14) 馮夢龍「情史類略」二十四卷(国立政治大学古典小説研究中心「明

清澤本小説叢刊」第二輯短編文言小説(二)筆記、天一出版社、昭和60・7)「情史」の刊本を調査した結果、刊本による語句の違いは殆ど見られない。そのため、綺麗にコピーできる右記の本を挙げる。

- (15) 李学穎「出版説明」(「本事詩 續本事詩 本事詞」上海古籍出版社、平3・4)

中国語の本文を筆者が翻訳してまとめたのである。本文は以下の通りである。本文を参照し時代、人名を直線で、書名を波線で示す。

孟架之後、紀事詩話踵起。五代處常子曾撰續本事詩、惜已佚而不傳。韻奉先續本事詩、僅存十五條、其中七條明引北宋人事。

據今人吳企明考證、韻奉先續廣本事詩五卷、載陳振孫直齋書錄解題卷二十二、則韻當為宋人、書名亦當作「續廣本事詩」。以留存過少、姑置不論。宋計有功唐詩紀事、已側重於存人錄詩。夙黜宋詩紀事成於清代、卷帙浩繁、更具有詩歌總集的規模、與「紀事」相去日遠。今存真正繼承孟架「以詩繫事」的、當推清初徐鉉的續本事詩。

- (16) 初出「淑女畫報」、大6・1、原題「史譚群玉峰」
(17) 初出「新修養」、大4・11、原題「竹枝韻話」
(18) 楊維禎「鉄崖先生古樂府」(「四部叢刊」第384、上海商務印書館、出版年不明)
(19) 徐鉉「本事詩」十二卷、清刊本

(本論文における「幽情記」諸編からの引用は幸田露伴の「幽情記」(大倉書店、大8・3)による。)

(オウ セイケツ 筑波大学大学院博士課程
人文社会科学科研究科 日本文学)